

ダンスを習えば、少しは運動神経がよくなるかもしれない。

そんな単純な理由で申し込んだ個人レッスンの初日。私は薄手のウエアとショートパンツ姿で、広いスタジオの入口に立ち、床から天井まである鏡を見つめていた。

昔から運動が苦手だった。人の動きを見てから真似をしても、考えているうちに体が遅れる。大人数の教室では周りについていけなくなるのが恥ずかしくて、一対一で教えてもらえるスクールを選んだ。

「今日から担当する石田健太です。よろしく」

声をかけられて振り向くと、背の高い男が笑っていた。受付で見た講師紹介の写真よりも体つきがよく、薄いウエアの上からでも肩や腕の筋肉が分かる。

「ダンスの経験は？」

「ありません。運動も、全然できなくて……」

「大丈夫。最初は俺の動きについてくるだけでいい

よ」

石田さんは緊張する私を鏡の前へ立たせ、床の印へ足を揃えさせた。まずは音楽に合わせ、左右へ重心を移すだけ。そう説明されたのに、曲が始まると頭の中が真っ白になった。

「右。戻して、次は左」

大きな鏡の中で、私だけが半拍遅れた。慌てて右足を引いたけれど、今度は向きが逆だった。床の印から足が外れ、左脚から力が抜ける。傾いた体が倒れる前に腰へ腕が回った。軽々と引き戻され、石田さんの胸へ背中が触れる。

「疲れると左から崩れるんだね。止まらないで、遅れても次へ行く」

「す、すみません」

「謝らなくていい。足元じゃなくて俺を見て」

顔を上げると、鏡越しに石田さんと目が合った。自己紹介ではよく笑っていたのに、音楽が流れている間だけは目を逸らしてくれない。

「もう一回。俺が動かしたほうへついてきて」

「でも、また間違えたら」

「間違えても俺が戻すから」

曲が頭から流れ直した。石田さんに取りられた右手が上がる。背中へ添えられた手に押され、一歩進んだ。次は横。足を寄せ、腰を捻る。ひとりなら途中で止まっていた。それでも彼が先に重心を移すと、引かれるように体が動いた。

「そう。今のは合ってる」

初対面の相手に短く褒められたただけなのに、胸の奥が落ち着かなくなる。失敗しても笑われず、できた動きだけを見つけてもらえたことで、固くなっていた肩から少しだけ力が抜けた。

「次、ターン」

繋がれた手を軸に体を回す。正面へ戻ったところで足がもつれ、石田さんの胸へぶつかった。

「す、すみません」

「また固くなった。俺に近づくと緊張する？」

「だって、近いから……」

「その緊張が、体を遅らせてる」

離れようとした腰を支えられた。曲は終わっている。それでも石田さんは私を放さず、肩へ手を置いた。

「ここも上がってる。息も浅い」

肩を押し下げられ、背中をゆっくり撫でられる。指が通るたび、力を入れていた場所が自分でも分かった。

「運動が苦手だから、緊張するんだと思います」
「逆だよ。間違えないように考えすぎて、動く前に
体を固めてる」

石田さんはさっきより遅い音楽へ変え、鏡の前へ
私を戻した。

「最後に、その緊張を取ろう。ステップはしなくて
いい」

「緊張を取るって……」
「俺が触ったところから力を抜く。体で覚えたほう
が早いから」

運動神経をよくしたくて、わざわざ個人レッスンを
選んだ。初日から足をもつれさせたまま帰れば、
次も同じ失敗をする気がした。

(ダンスのために必要なことなんだ……)

そう自分へ言い聞かせ、私は鏡の前で頷いた。

「まず肩」

背後から両肩を掴まれ、親指で首のつけ根を押された。揉みほぐすように指が動くと、強張っていた肩が少しずつ下がる。

「次は背中。息を吐いて」

肩甲骨の間を手のひらが下りていく。促されるまま息を吐くと、手は背中の中央から腰へ移った。

「ここが固いと重心が動かない」

腰の両側を包まれ、音楽に合わせて右へ押される。戻ろうとすると左へ導かれた。ステップを踏んでいないのに、石田さんの手が動くだけで腰が揺れる。

「そう。考えないで、俺が動かしたほうへ」

褒められると、拒む理由がひとつずつ薄くなる。

触れられる範囲は広がっているのに、これは硬い体を直すための指導だと思えば、どうにか鏡の前へ立っていられた。

「まだお腹に力が入ってる」

腰にあった片手が、くびれをなぞって腹へ回る。ウエア越しにゆっくり押され、私は反射的に息を止めた。

「ほら、また止めた」

「でも、そんなところまで触るんですか」

「体幹が固いままじゃ、足だけ練習しても変わらないよ」

もっともらしい説明に何も返せなくなる。

(体の力を抜く練習なんだから……)

深く息を吐くと、腹を押さえていた手が私の呼吸

に合わせて上下した。

「力を抜いて。俺に預けて」

背後から抱き込まれ、背中が石田さんの胸へ密着する。近すぎると言うほど、また体が固くなる。そのたびに肩、脇腹、腰を撫でられ、力を入れた場所を見つけられた。

「初めてなのに、もう俺の動きについてこられてる」

「レッスン、ですから」

「そう。これもレッスン。俺に触られても固まらないようにしようか」

耳元で声が低くなる。鏡の中で目が合い、動揺して俯きかけた顎を指で戻された。

「鏡を見て。自分がどこで緊張するか、覚えて」

首筋へ顔が近づき、私は肩を竦めた。

「そこは、ダンスに関係ないんじゃない……」

「触られる前から固くなった」

首のつけ根を指で押され、肩を下げられる。逃げるように一步踏み出すと手を取られ、その勢いのまま半回転させられた。背中が鏡の脇の壁へ触れる。石田さんの腕が横につかれる。力任せに押されたわけではない。次に動く場所を先に決められ、私はまた指示どおりの位置へ立たされていた。

「また考えすぎてる」

「でも……」

「今は俺の動きだけ感じて」

顎を持ち上げられる。石田さんの顔が近づくほど、動悸は速くなった。

石田さんは私から目を逸らさないまま、汗の浮いた首筋へ唇を寄せた。

ちゅ♡ちゅ♡

「……っ♡」

体がぴくりと反応する。

(今のも、緊張を取るため……？♡)

押し返そうと胸に手を当てると、その手首を柔らかく掴まれて鏡の脇へ固定された。逃れようとしても、掴まれた手首は鏡の脇から離れない。

「最初から見てたよ♡間違えるたび、一生懸命ついてきてた♡」

首筋へキスを重ねながら、唇が少しずつ上がってくる。顎を辿り、下唇から上唇まで啄まれた。

「うんっ♡」

息を呑んだところへ、角度を変えた唇が深く重なる。